

## 新刊紹介

S.マックレーン著、赤尾和男・岡本周一共訳

『数学——その形式と機能』(森北出版、1992年5月発行、8400円)

————— 駒木 泰

1992年に出版された本書は、新刊でもなく、経済学とも程遠い。しかし、考えさせられる著作に出会ったので、紹介してみたい。トポスに触れる機会があり、文献を探していたところ、本書に遭遇した。線形代数や微分積分は大学の教養科目で学んだが、トポロジーや圏論については皆目無かったからである。解説は、川が流れるように論理的であり、既存の概念も見方を変えるだけで理解できる。特に、集合を理解するのに非常に役に立った。集合を使ったいろいろな定義や定理は、多くは部分集合に関するものである。部分集合というと、集合に含まれる要素を集めて、新たに集合を作るものと理解していた。まず全体集合を考え、次にその中でど

のような集合にしたらいいかを、考えなければならない。

しかし、本書では、「集合とは集合の集合である」と解説する。部分集合が出てきた時点で、すでに集合が出来上がっていることになる。これで余計な手続きを踏まずに、次のステップに進める。発想の転換が物事を次に押し進めることを、実感できた著作である。微分積分の解説もそれらの概念の起源から解説しており、はじめに数式ありきの説明とは一線を画している。微分積分の講義が可能だった時代に、もしも本書に出会っていれば、この解説を参考としながら、受講者に発想の転換を促せたのかもしれない。

渡辺淳一著

『鈍感力』(集英社、2007年発行、1155円〈税込み〉)

————— 千葉 隆生

「鈍感力」という言葉は、小泉純一郎元首相が「政治家には鈍感力も必要である」と発言したことから有名になった言葉であり、2007年流行語大賞候補にもなった言葉であるが、本来は、渡辺淳一氏が書いた『鈍感力』という、現在では、100万部を超えるベストセラーとなっている本がきっかけである。普通、ベストセラーになったような人気のある話題の本は読まない主義のへそ曲がりの私は、「どうせ、どこぞの政治評論家が書いたひとりよがりの屁理屈を並べ立てただけの本だろう」とたかをくくって、読む気もなかったのだが、先日、たまたま訪れた本屋に

平積みしてあったこの本が目に入り、まあ立ち読みくらいならと思って、手にとって読んでみたところ、医学的な根拠に基づいた内容で、しかも読みやすいのである。それもそのはずで、著者である渡辺淳一氏は、元札幌医科大学の整形外科医であり、若い頃から、作家と医者との二足の草鞋を履き、後々、作家として一本立ちした異色の作家だったのである。彼の代表作には、あのドラマや映画にもなった『失楽園』もあり、いろいろな才能に恵まれた人なのだ。したがって、この本の内容もストレスと体の関係などを交感神経と副交感神経などを使ってわかりやす